

夕暮れ迫るアジアの港。洋館が建ち並ぶ船着き場には五カ国の国旗がはためいています。題名が「廣東〓広東」というからには古くから貿易港として栄えた中国の広州でしょうか。でも、経済学部の前松本陸樹教授によれば、実はこのガラス絵、そもそもタイトルが問題なんだとか。十九世紀、ガラス絵の技術が導入された中国で当時好まれた絵柄で、長崎大学経済学部の前身、長崎高等商業学校の名譽教授でもあった武藤長蔵博士のコレクションの中にも三種類が所蔵されています。古書の収集家として有名だった博士はかなり執着したようで、「中国で見かけて二度ほど買いそびれて、やっと三度目に購入できた」というこだわりぶり。恐らく、中国貿易を研究していた博士としては絶対に手に入れたかったものなのでしょう。そして名付けた「廣東十三行図」。しかし後の研究によれば「廣東十三行」とは中国で貿易を認められていた中国側の商人や商家のことを指し、欧米の商人や商館とは別のものです。ですから欧米の商館が並ぶこの絵も、本来ならば「広州商館図」あたりが妥当だったのかもしれない。

しかもこの作品、よくよく見れば平地であるはずの珠江沿岸にマカオのような小高い山があるし、何より国旗の柄がちよつと妙だと思いませんか。左はデンマークですが、中央は何やら薬品会社のマークのよう。その隣はどうやらユニオンジャックの色違い、右側もオランダ国旗にしては配色が妙です。「もしかしたら、実際に広州で描かれたのではなく、行ったことのない誰か、例えば長崎の絵師が写したものなのかもしれない。だからこそ博士は手に入れたかったのか……今となっては想像をかきたてられますね」と松本先生。

三点ある中でも、こちらはもっとも大きくA1のポスターサイズ。十九世紀の作品で、ここまで大判で縦型のガラス絵は珍しく、洋画風の立体的な画法も見どころのひとつ。組子細工の額縁には裏に武藤博士のサインが入っており、こちらも昔の職人の見事な仕事ぶりが伺えます。

「もの」には物語があります。大切にしてきた人々の思いがあります。このコーナーでは、長崎大学のキャンパスに眠るお宝や芸術作品をクローズアップ。その背景を知り、好奇心をくすぐられたら、今度は本物を観に大学に足を運んでみませんか？

温故知新
Find new wisdoms through old things.
Volume 4

ガラス絵 「廣東十三行図」

かつて「長崎学の三羽ガラス」の一人とうたわれた、武藤長蔵教授。彼のコレクションにあるガラス絵が修復を終えました。大きくて謎の多い、不思議な魅力のガラス絵です。



ガラス絵
「廣東十三行図」
作者不明
長崎大学附属図書館経済学部分館
武藤文庫展示室所蔵

ガラス絵とは、平板ガラスの裏側から絵具で着色し、表から鑑賞する絵画技法。この作品は最近修復を終え、片淵キャンパスの二画、附属図書館分館2階にある武藤文庫展示室の書架に保存されています。見学をご希望の方は、図書館職員にお申し出ください。